

唐代佛敎史の研究

道端良秀著

昭和三十三年三月 法藏館發行

A5版 本文五四五頁

本書は中國佛敎史、特にその社會史的方面的の研究に従事してこられた道端氏の、唐代に關するいくつかの勞作をあつめたものである。しかも、舊稿には多く筆を加え、更にあらたに書きおこされた部分もあり、各種の問題に及びながら系統的にまとめられている。従つて、本書は唐代佛敎史の論文集ではあるが、綜合的な通論とも言うべき体裁をとつており、本書の出版は唐代史の一面を補い前進させるものとして、重要な意義を有していると思われる。

今更述べるまでもなく、中國佛敎の社會經濟史的研究を開拓し促進するのに非常な貢獻をなしたのは、雜誌「支那佛敎史學」であり、それを創刊し、それを活動の舞台とした同史學會の同人達であつた。今日の社會經濟史的方面的の業績も殆んど當時の研究に基づいているのであり、この雜誌が創刊された昭和十二年は、實にわが國中國佛敎史學史上の特筆すべき一時期とされている。著者の道端氏は、塚本教授が本書の序文に述べておられるごとく、同會の發起人の有力な一員であり、終始中核的存在として活躍されたのであつた。同誌創刊號の「創刊後記」を読むならば、これを執筆された著者の激しい氣概と大きな抱負とに打たれるであらう。事實、着々と新しい研究を發表されたが、そのめざす所は「中國佛敎々團の社會經濟的問題」(本書自序)であつた。そして、その豊富な佛敎知識を驅使しつつ、しかも宗派のドグマにとらわれない客觀的立場からする幾多の研究は、當時より廣く學界に注目されていたと聞いている。それ以

來二十年、たゆまぬ精進の結實として、ここに五百餘頁の大著が世に問われることになつたのである。このような過程を通じて生み出された本書は、佛敎史學史上に輝しい一頁を飾るものとして、殊更意義深いものがある。

さて、本書は五章よりなつてゐる。以下章ごとにその概略を紹介しつつ、一二感想を付したいと思ふ。

第一章 唐朝の佛敎對策。極盛期を迎え老大な敎團を擁する佛敎に對し、唐朝が如何に對處したかを「官寺の設置と內道場」「度僧制度の問題」「寺院僧尼の取締と沙汰」の三點より眺める。そして、結論としては、唐朝の根本的立場は佛敎保護の政策にあつたが、敎團を強力な國家權力に屈服させて御用宗教とした。その現れが官寺や內道場の設置であり、保護政策の結果が敎團の膨脹と弊害を招き、度僧制度や沙汰の問題を生じたとする點にある。しかも「この章では特に度僧の問題を中心とし」ており(自序)、もつとも多くをこれに割いてゐる。先ず、得度の意味を解説し、得度の方法―試經度僧―特恩度僧―進納度僧あるいは賣度―とその實例を克明にたどり、特に進納・賣度による僧は多く私度僧であり、財政救済の爲に地方官が勝手に行うようになつて多くの問題を生じた。賣度の始めを一般に肅宗朝の裴冕とするが、中宗頃には既に行われており、更に古く南北朝に遡上れようと述べ、更に度牒の始めを天寶六載とする『僧史叢』の誤謬を細密に指摘し、形式は異なるとしても僧尼の認定書は東晉時代から行われていたろうと説く。(このことはすでに二、三の人々から指摘されている)又、戒牒・僧籍に觸れ、最後に私度僧の問題に及ぶ。私度僧とは僧籍なく度牒なき僧で、普通に私度偽濫僧とみるが、必ずしもそうではなく、度牒があつても私度とし

て排斥されたし、求道のまじめな私度僧もいた實例を挙げ、そこで私度僧を外形的・内容的・手續上から多くの場合に分類している。そして「この私度僧の問題が中國佛教々史の鍵である」(自序)と言っているが、蓋しの確な指摘であり、同時に唐代史全体を解明する鍵の一つでもあろう。たゞこゝでは問題の提起に終つてゐるので、今後の究明に期待したい。最後の問題では、寺院僧尼の統制機關・僧尼に對する法令を概説した後、唐朝の佛教の取締と沙汰政策を年代順に敘述して、いわば本書の總括を行つてゐる。そこで、これらの取締りは結果的には教團健全化のために外部から行われた佛教の保護政策であり、會昌の廢佛も傳統的佛教保護の一環としての佛教の大改革であり大整理運動であつたとする。注目すべき説であるが、排斥が保護政策であるという積極的な根據に乏しいように思われる。又、沙汰なり廢佛の結果よりも、政策が打ち出された意圖こそ重要であり、沙汰の詔勅文に書かれた字句そのままを理由とするのも早計ではなからうか。なお掘り下げて考察すべきであらう。

第二章 佛教徒の精神生活と民衆教化。唐代もつとも隆盛であつた「淨土教徒の精神生活」について、淨土往生の型態を各階級・僧尼・王公貴族・一般庶民に分けて検討し、その信仰内容を各種の往生傳・祖師の著述に基づいて論究する。そして、彼等の信仰は彌陀・彌勒の區別も明白でない漠然としたもので、信仰の行業も多様であつたと結論づけてゐる。このことは淨土教に限らず、中國佛教全体に言えることであらうし、日本佛教と比較して重要な特質をなすものであらう。次の「佛教徒の民衆教化」では、民衆教化に従事した人々とその教化の方法とを詳細に分類し、特に俗講と變文について佛教々化の面から分析を行つた。この問題ではわが國に那波博

士の諸研究があり、中國側からも數多くの論文や資料が續々發表されて、最近の中國俗文學史上の一焦點である。著者はこれらの諸業績によりつつ佛教史側から考究しようとしてゐる。その主な見解は次のごとくである。(1)俗講とは俗人に對する講經で「通俗的」の意ではない。(2)俗講と唱導とは全く成立を異にしており、兩者ははつきりと區別しなければならぬ。俗講は純然たる講經の系統に屬し、講經↓覆講↓俗講の過程をたどるもの、唱導は専門の布教家で唱導文を誦して地方を巡回するものである。(3)『杜陽雜編』に記す講座・唱經座の二高座設置について、那波説では唱經座が講經の合間に行う餘興的催物をなす座で南宋の説經・談經の淵源をなすとするが、これは講經時の都講が經題を唱ふる座で俗講とは無關係である。(4)變文は俗講の種本であるが、また唱導師らの種本でもあり、廣く佛教々化の資料であつた。要するに、著者は俗講等を南北朝以來行われて來た佛教の民衆教化の中に位置づけて考察しようとしたのである。そこで明らかにされた右の諸見解は、今後この方面の研究に多大の寄與をなすであらうと思われる。ただ(2)の俗講と唱導の關係については、かなり疑問が残るようである。兩者は「根本的な差異」をもち「確然と區別」しなければならぬとしながら、所謂俗講が盛んであつた中唐頃に兩者が具体的にどう違つてゐたか明らかでなく、逆に「假令後にその結果や方法が同じとなつたとしても」(二六四頁)とか「唐中葉以後……次第に判然と區別することが出來な」(二六五頁)くなつたとか述べ、肝心の問題がぼやけてしまつたように感じられる。それが明らかでないかぎり、變文の問題も十分に納得できない。なお、本章の構成に重要な位置を占めてゐる初唐に俗講が存在したとの説には、小笠原宣秀氏の批判がある(佛教史學六

(一)。

第三章 佛教と實踐倫理。佛教の中國的發展を儒教倫理の中心である孝において考察した近年の勞作數篇で構成されている。先ず「中國社會と儒教の孝倫理」を述べ、特に儒教孝倫理の代表的立場としての「二十四孝」に及び、「佛教孝經典の流布」では、特に「父母恩重經」の成立を考察して、庶民社會を對象としたこの經が孝經典の欠陥を補い、孝を要求する社會に歡迎され廣く普及したという。佛教の民間浸透を知る上に重要な一面であろう。結論でこの經が普及したのは「當時一般社會の孝に對する要求が熾烈であつた爲」(三一五頁)とあるのは、具体的にどういふことを指すのであろうか。むしろ、御用宗教としての社會指導性に多くを求むべきでなからうか。なお、本書出版當時では内容を知らえなかつた「二十四孝抑座文」が、最近の『敦煌變文集』に「故圓鑿大師二十四孝抑座文」として収載されている。ところが、これは佛教側から儒教の孝との一致を詠じており、果して唐代でも二十四孝を儒教の代表的孝倫理として擧げられるか、どうか、今後の究明に期待する。この章の後半では「唐代佛教徒の孝道論」「僧尼の君親に對する拜不拜の論争」「五戒と五常との問題」と、孝を中心に様々の角度から眺め、最後に儒佛の孝を比較して二つの差異を擧げる。即ち、(1)儒教の孝は肉體的・現實的で、佛教のは精神的・將來的である。(2)根本的差異は、儒教の孝が身分的規制であるに對し、佛教の孝は自由と平等に立つものとしてゐる。

第四章 佛教と社會事業。慈悲・布施・福田等の佛教の根本思想に基づき、社會の諸欠陥を是正するために行われた多くの社會救濟事業を、悲田養病坊と宿房の問題を中心に述べられている。特に後

者については那波博士の研究もあり、唐代の交通史上からも重要な問題である。五台山の普通院のごとく、はじめは僧尼や巡禮者のために提供されたものが、次第に一般社會へ開放され長期的な賃貸室に發展した。後には寺院經濟の一環としてその目的の爲に經營され、又これを通じて貴族・官人・軍人らとの關係が密接になつて、功德院をはじめ多くの弊害が生じたことを明かにしている。なお、「佛教と社會事業」については、稿を改めてまとめられる豫定である(自序)。

第五章 佛教寺院と經濟問題。昭和十年前後に發表された老大な佛教教國を支える寺院經濟に關する嘗つての力作を集めたもので、本書ではもつとも舊稿に屬する。ここでは、寺領莊園と無盡||質業とがその中心である。前者では、特に寺領に常住物||共有物としての寺田と、僧尼個人の所有である僧田とがあり、均田法でも兩者が區別されていたことを論證し、寺田と僧田の關係や變遷に説き及んでいる。實に明確な優れた研究である。もちろん舊稿のままでも高い價値を有しているが、近年の成果を採り入れていただければなおよかつたのではなからうか。後者の無盡について、これが中國では大乘佛教の福田事業として始められたが、後には純然たる蓄財の目的に變り、高利貸的性格を帯びて逆に民衆を苦しめることになつたことを明かにしており、貴重な論文である。

以上、非常に蕪雜な紹介で理解のいたらないところも多かつたと思うが、なお本書を通じての感想を申し上げるならば、先ず著者がいつも新鮮な感覺をもつて凡ゆる問題に取り組んでこられた事が窺われる。寺領莊園の問題、俗講と變文などがそれで、いずれも發表當時の中心問題であつた。佛教に關係したそれらの課題に佛教史側

から積極的に参加し、佛教の専門的知識を待たねばならない事柄について次々に解明を與え、廣く學界に寄與してこられた。その研究の態度は、これから同じ道を進もうと志す筆者にとつて教えられる所が極めて大きい。しかも、論究にあつては、漠然と理解されていた概念や事柄を分析分類し、更に複雑な過程を巧みに整理し系統化していくところ、著者の明晰さ緻密さに敬服せざるを得ない。しかし、割り切りすぎる結果、逆に餘りにも系圖的で核心の問題に深く入りこめない嫌いがないでもない。もう一つ、本書の特色として、それぞれの問題について網羅的に全体的に論述されていることが挙げられる。一一の事項毎に可能な限り資料を集め、過去の諸研究に依據して、系統的に客觀的に詳細な敘述が行われていて、取り上げられた問題なら本書をみれば見當がつけられるほど、實に懇切丁寧である。それ故に本書が廣く今後の研究に「確かな礎」(塚本序文)となるであらうと信ずる。またそれだけに問題の焦點がぼやけた面がままあり、複雑なものが綜合し整理されてはいるが、生々とした歴史の流れを汲みとりにくいように思われる。今後、横のひろがりと同時に、唐代を中心にして歴史的に深められることを期待したい。かねてより著者の諸論文を通じて啓發され教えをうけて來た筆者にとつて、一部ではあるが一冊の本にまとめられ、いつも座右に置いて教示を乞えることは非常な喜びである。なお多くの問題が残されてはいるが、實はそれが即ち中國佛教史學の現状なのであつて、それを深めていくのがわれわれに課せられた道であるとも感じられるのである。その意味において、本書は後進者に對する啓發の書であると言えるであらう。敢て爲して來た數々の妄言も、淺學の筆者の自己批判をかねた望蜀の言なのである。

(竺沙雅章)

昭和三十二年東洋史卒業論文題目

修士論文

清代の銓選

近藤 秀樹

ダリウス一世のアフラマツダ信仰について

惠谷 俊之

清代漕運制度の崩壞過程

山口 勉子

—商人勢力の發展と關連して—

唐代の公廩本錢・食利本錢について

横山 裕男

學士論文

三藩の亂

齋藤 哲男

三國魏の田制の一考察

野村 安彦

明代蘇州地方の官田に關する雜考

森 正夫